

保育者を目指す学生に対する 生命尊重教育の必要性について

佐藤 達全¹⁾

The Significance of Respecting Life Education for Students Aiming to Become Childcare Workers

Tatsuzen Sato¹⁾

Abstract

Generally, it is impossible to deny the importance of cultivating “the mind to respect life”. The reason is that everyone has one life to live and it can never be back, once it is lost. Therefore, one of the core objectives of education is to cultivate the mind to respect both the lives of other people and one’s own life.

However, there is one more aspect in respecting life. That is a viewpoint, which suggests not only “keeping one’s own life unhurt” but also “living the given life as much as possible”. But when it comes to “respecting life”, there is a tendency that the attention is paid to the former.

This research project focuses on respecting life from the viewpoint of “living the given life as much as possible”. Early childhood education plays an important role in cultivating the mind as such. In addition, the way that childcare workers lead their lives has a great effect on children in early childhood education, so it is necessary for students aiming to become childcare workers to consider how they live their own lives. This research applies the viewpoint as such and examines the significance of respecting life education for students.

Key words : Life respect, urbanization, nuclear family, living experience, regaining consciousness

キーワード : 生命尊重, 都市化, 核家族化, 生活体験, 気づき

1 はじめに (〈いのち〉とは)

これまで、筆者はさまざまな機会に保育における「生命を尊重する」ことの意味と「生命と向きあう視点」について発表を行ってきた。私たちは、なぜ生命を尊重しなければならないのであろうか。それには、次のようないくつかの理由がある。

1) 育英短期大学保育学科

まず第一に、生命の誕生は「赤ちゃんを授かる」と表現するように、人為を超えた「無条件にかけがえのないもの」だからである。もちろん、現代の医学では生命の誕生に、さまざまな操作を加えることが可能になってきた。不妊治療の方法としての人工授精や、それとは反対の人工的に妊娠を中断することがその代表的なものといえよう。

しかし、人工授精といっても「人工」的に精子や卵子を創り出すわけでないことは言うまでもない。あらかじめ取り出したり凍結保存しておいたりした精子や卵子を用いるか否か等は個々の事例によって異なるであろうが、「人工」と言っても、男性と女性の体内に存在する精子と卵子が受精しやすくなるように手を加えるに過ぎない。

しかも、生物学的に精子と卵子が受精する確率を考えると、まさに限りなくゼロに近い数字といえるほど、小さなものである。中学校で習う理科の説明によれば、わたしの〈いのち〉になったのは母親の体内に存在した約700万個の卵子の中のひとつであり、卵子と受精した精子は一度に放出された1億から2億の中のたったひとつであるから、私の〈いのち〉が誕生する確率は700万分の1と1億分の1を掛けた700兆分の1という小さな数字である。

また、この受精卵の細胞数はたった1個であるが、子宮の中で10か月ほどの間に分裂をくり返して60兆個という膨大な数になって、さまざまな臓器を形成する。こうした生命誕生の過程を考えると、ますます「授かる」という表現が現実味を帯びてくるのではないだろうか。

第二の理由は、この世に誕生した生命は、誰にとっても「たったひとつしかない」ものであり、他のいかなる人とも交換することができないからである。もちろん、現代医学では身体の一部に病気や怪我といったトラブルが生じた場合に、それを解決するために皮膚や臓器を移植するといった方法での治療法が確立されてきた。

しかし、人体のどの部分でも移植が可能というわけではないし、仮に移植が成功しても生命が存在するために必要な「免疫作用」が「拒絶反応」となって移植という医療行為を困難にする場合がある。さらに、古くなった臓器を次々に交換することによって永遠に生き続けることができるわけでもない。それゆえ、基本的には〈いのち〉が「ひとつしかない」ことは間違いない。

第三の理由として、私たちの〈いのち〉は永遠には生きられないからである。また、その「終わりの日」を自分で決めることはできない（「自死の場合は自分で決めたのではないか」という問いがあるが、みずからその生を絶とうとしても必ずしも望んだ結果になるとは限らない）し、終わりの日が近いのかずっと先なのかも知ることはできない。そして、ひとたびこの世での生を終えたと、二度とこの世に戻ってくることはできない。

こうした生命の現実について、写真家として世界的に知られた土門拳（故人）は「死と生は隣りあっている」と表現した（土門拳著『死ぬことと生きること』）。土門はその著書の中で次のように述べている。

人間は死ぬ。どうじばたしても、しょせんいつかは絶対に死ぬ。

ところが、生きている人間は、自分が死ぬものだということは、普段、全然忘れて暮らしている。きょう生きていることは、あしたも生きてることだと思っているし、今年生きていることは、来年も生きてることだと思いついでいる。そこに何の疑いも恐れもないように見える。（中略）人間はなかなか死なないものだと、誰がいうとも、ぼくは信じない。人

間の善意や愛情とかかわりなしに、死は、不意に、容赦なく襲ってくる。(中略)いわば、死は、日常不断にぼくたちの1メートルのそばを走り去っている。死と生とは、すれすれに隣合っている。死か生か、二つに一つの厳粛な結果だけが、事実としてぼくたちの瞬間瞬間を決定しているのだ。(註1)

土門が言うように、若いか年をとっているかということには関係なく、私たちは「いつ死ぬかわからない状況」で生き続けているのである。このことは、突然に襲ってくる不治の病気や自然災害を初めとして、さまざまな場面で発生する悲惨な出来事を思い浮かべてみればすぐに納得できるはずである。

つまり、私たちにとって最も大事なことは「今日という1日をどのように生きるか」ということではないだろうか。

2 生命尊重と現代社会

私たちの〈いのち〉が誰にとっても「たった一つしかないもの」であり、ひとたびそれが失われた場合は二度とこの世には戻れないということは、すべての人にあてはまる「絶対的な真理」なのであるから、自分の〈いのち〉であるか他人の〈いのち〉であるかに関係なく、「いま存在している〈いのち〉を可能な限り大切にすること」が、どれほど重要であるかはだれでも理解できるであろう。

しかし、現実の世界に目を向けてみると、それほどに大切な〈いのち〉であるはずなのに、他者のみならず自分の〈いのち〉を傷つける行為が頻繁に引き起こされているし、他者の〈いのち〉や自分の〈いのち〉を死に至らしめる行為も跡を絶たない。もちろん、以前にもこうした事件は発生していたのではあるが、そうした事件が引き起こされる背景が貧困による窃盗や強盗・怨恨等、その動機がある程度明確であった。

ところが、最近は「理由のない無差別な殺人や傷害事件」がひきおこされる割合が増えてきたのではないだろうか。さらに、事件を起こして逮捕された容疑者の口から「人を殺してみたかった」という、耳を疑いたくなるような驚くべき言葉が発せられたことも一度や二度ではない。商店街や鉄道の駅周辺で、犯人とは何の関わりもない大勢の人が傷つけられたり生命を奪われたりするだけでなく、学校で、しかも授業中に「ふつう」のクラスメイトであった同級生を殺傷する事件も発生している。

そして、こうした事件を引き起こした人の年齢も、小学生から成人（高齢者）に至るまでその幅が広がっている。当事者が児童生徒の場合は学校生活における人間関係のトラブルが引き金になっている場合も少なくないが、そればかりではない。まだ、それほど多くはないものの、そのひとつが前述した「人を殺してみたかった」という容疑者の言葉である。取り調べの過程で明らかになったとして報道されたものであるから、これだけで軽々に結論づけることは避けなければならないが、筆者はその原因のひとつは、「生命とは何か」ということがわからなくなってしまった結果ではないかと考えている。

なぜ「生命」の姿がわからなくなってしまったのであろうか。そこには、核家族化や都市化・

工業化といった社会構造の変化によって、「生命」とふれあう機会が急速に減少してしまった現代社会の負の側面が影響しているのではないかと考えている。それを裏付けるような調査結果も報告されている。たとえば、中村博志・日本女子大学元教授は、「死んだ人が生きかえる」と考えている児童の存在について、次のように非常に興味深い調査結果を紹介している。

最近の子供たちは、死についてどんな考えを持っていると思いますか。いまから十年ほどまえのことになりますが、金子政雄先生の論文を拝見しました。この論文によると、小学校六年生約三百人に対して(一九九五)「一度死んだ生きものが生きかえることがあると思うか」という質問に、なんと四分の一が「生きかえる」、さらに四分の一が「生きかえることもある」と回答をしていたのです。

最初はほんとうかなとも思いました。しかし、その後、私も同様な調査を実施してみたところ、二〇〇〇年におこなった都内小学校二校の高学年、約四百名の調査では約三分の一が「生きかえる」、三分の一が「生きかえることもある」と回答しております。「生きかえらない」と答えたものは約三分の一に過ぎませんでした。^(註2)

すぐには信じられないような調査結果であるため、この結果に対して調査の信憑性を疑う意見も出されたが、小学六年生の女子児童が同級生を授業中に殺害した事件や中学一年生の男子生徒が保育園児を殺害した事件が連続した長崎県で、同じような調査を実施したところ、中村・元教授の調査結果とそれほど大きな差違がみられなかったという。

第二次世界大戦後、急速に経済を復興させた日本社会は、昭和三十年代から高度経済成長を成し遂げたが、それに伴って人口の大都市集中や核家族化が一気に進んだ。農業を主体とした経済から工業が中心になって国民全体の所得が増加しただけでなく、「一億総中流」と称されたように、国民全体の衣食住における生活水準が向上し、上級学校への進学率も高くなったのである。

こうしたことがらは望ましいことではあるが、その一方で、人間関係の稀薄化・都市化による動植物とのふれあいや核家族化による高齢者との関わり減少といった状況も発生している。

このような状況の中では、「人は老いるものであり、いつかは必ず死ぬものである」「死んだ人間が再びこの世に戻ってくることは絶対はない」といった〈いのち〉の現実がわからなくなってしまうのもやむをえないのだろうか。

中村が紹介したように「死んだ人が生きかえる」と考える児童・生徒が多くなれば、将来的に人を殺すことに何の心の痛みも感じない大人が多くなるかもしれない。その結果が「人を殺してみたかった」という言葉だとしたら、そうした心をどのように修正したらよいのであろう。中村は同じ本の中で「生きかえることがあるというのは、死を軽く考えている証拠」と述べている。^(註3)

もちろん、こうした行為は絶対に許されることではない。それは、誰がなんと言おうと、医学がどれほど進歩しようと、「生は一回限りのもの」であり、ひとたびこの世から去った〈いのち〉が、この世に戻って来ることは絶対はないからである。

むしろ、〈いのち〉の本当の姿がわからなくなってしまった時代だからこそ、私たちは改めて「自分の〈いのち〉」とも「他人の〈いのち〉」ともしっかりと向きあうと同時に、かぎりある生命を「ど

う生きたらよいか」について真剣に考える必要があるのではないだろうか。

3 生命の尊重と保育・幼児教育（研究の方向性）

自他の生命を傷つけたり奪ったりしてはいけないということは、だれでも考えることである。けれども、これは大切な考えではあるものの「消極的な生命尊重」であり、この段階に留まるのではなく「積極的な生命尊重」に進まなくてはならないであろう。それは「今日」という一日をどのように生きるかという問題であるが、精一杯に生きる（勉強であれ、仕事であれ、なすべきことに全力で取り組む）ことが「生命を大切にすることである」という認識はあまり見られないように感じられる。

いろいろな報告でも、生命尊重をこのように規定する考え方は、これまであまり見られなかった。そこで、幼児に「自分以外の〈いのち〉を傷つけない」というだけでなく、「自分の〈いのち〉を精一杯生きようとする心」をどのようにして育むかは非常に重要な課題であり、そのためには幼児の発達のモデルとして保育者や保育者を目指す学生も自分自身の日々の生き方を振り返ってみなくてはならないはずである。

ところが、多くの学生はこうした点についてはあまり関心を持っていないように思われるので、保育者を目指す学生が自分自身の生き方を振り返る必要性について考察するのが本稿の目的である。そうすることが、限りなくゼロに近い確率の中でこの世に生を授かった私たちに与えられた課題だと考えるからである。

このような視点が、乳幼児を保育する保育者にとって非常に重要だと筆者は考えている。それは、保育の目的が乳幼児の生命を保護するだけでなく、その可能性の芽を最大限に伸ばすことだからである。上述したように、生命尊重をこのように捉えることは、これまではあまり見られなかった。しかし、「生命」の本質について考えればこのような見方が必要なことはすぐに納得できるのではないだろうか。

保育という営みは、子どもの身体的な面での「生命」を保護するだけでなく、子どもの中に潜んでいる「可能性」の芽を十分に伸ばすことでもある。

幼児教育や保育の方向性を示した「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」には、そのことについて次のように示されている。

「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第二十二条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」（幼稚園教育要領：第一章 総則）

「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない」（保育所保育指針：保育の原理）

このように、乳幼児期は長い人生の基礎作りをする非常に重要な時期と位置づけられている。

しかも、この時期の子どもは周囲のひとの行為や生き方から受ける影響がきわめて大きい。そのため、保育者は子どもの成長の「モデル」としての立場を自覚して、まず、みずからの「生き方」と向きあって、「生命」を尊重しなくてはならない立場なのである。

4 生命を尊重することの3つの視点

そこで、まず生命を尊重することについて3つの視点を整理しておこう。

(1) 他者の生命を傷つけたり奪ったりしないという視点

一般に、生命尊重という場合に誰もが最初に思い浮かべるのは「他者の生命を傷つけたり奪ったりしない」という視点であろう。これは、なぜかとその理由を聞かれても返事に困るほど「明白な」命題である。それゆえ、法治国家においては、他者の生命を傷つけたり奪ったりした場合には法律に基づいた罰則が科せられることが規定されている。

法律に定められた罰を科すという規定が、こうした行為に対して一定の抑止効果をあげているものの、最近では、それだけでは十分な抑止力として機能しないような事件も発生している。

さらに、この場合の「他者」を人間だけに限定するか、人間以外の「生き物」にまで広げるかは、国や民族によって必ずしも同じではない。日本では、動物保護法といった法律に基づいて野生動物をむやみに殺害した場合に罰を受ける場合があるが、自動車を運転しているときに飛び出してきた動物を不可抗力でひき殺したからといって罪に問われることはないのではないか。仮に道路に飛びだしてきた犬を死亡させてしまった運転手が警察に届けることなく走り去ったからといって、警察で犯人を捜査することはほとんどの場合ないと言ってよいであろう。

(2) 自分の生命を傷つけたり死に至らしめたりしないという視点

二つ目は、自分の生命を大切にすることである。他者に対する場合と同様に、自分の生命を傷つけたり死に至らしめたりしないことも、生命尊重と考えられる。ただ、自分の生命を傷つけたからといって他者の生命を傷つけたり奪ったりしたときのように罪に問われることはないし、仮に自己の生命を抹殺したという理由で殺人罪に問われたとしても、罰する対象がこの世に存在していなければ罰しようがない。

また、自傷行為や自死の問題もあるが、論点が広がりすぎるためここでは触れないでおく。

(3) 動物や植物の生命を傷つけたり奪ったりしないという視点

(1)でも触れたが、三番目に思い浮かべられるのは人間以外の動物や植物の生命を尊重することであろう。もちろん、倫理的な理想として動物だけでなく植物をも含めた「生命尊重」が広く受け入れられていることは否定できないであろうが、人間以外の生き物に対する意識は東洋と西洋によって、具体的にはキリスト教や仏教といった宗教を背景にした価値観によって大きく異なっていることが指摘されている。

例えば、『ビルマの豎琴』で作家としても知られた竹山道夫東大教授（故人）がパリで体験した興味深い出来事が、彼の著書に記されているので紹介してみよう。

あるとき大勢の会食で、血だらけの豚の頭がでたが、さすがにフォークをすすめかねて、私はいった。

「どうもこういうものは残酷だなあ……」

ひとりのお嬢さんが答えた。

「あら、だって牛や豚は人間に食べられるために神様がつくってくださったのだから」

幾人かの御婦人たちが、その豚の頭をナイフで切り、フォークでつついていた。彼女たちはこういう点での心的抑制はまったくもっていず、私が手元を躊躇するのをきやっきやっと笑っていた。

「日本人はむかしから生物を憐れみました。小鳥くらいなら、頭からかじることはあるけれども」

こう言うと、今度は一せいに怖れといかりの叫びがあがった。

「まあ、小鳥を！あんなにやさしい可愛らしいものを食べるなんて、なんという残酷な国民でしょう！」

私は弁解の言葉に窮した。これは比較宗教学の材料になるかもしれない。^(註4)

このことに関しては、たしかに『創世記』に、

そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。そこで神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた。「ふえかつ地に満ちよ。また地を従えよ。海の魚と、天の鳥と、地に動くすべての生物を支配せよ」
生きて動いているものはみな君たちの食料にしてよろしい。

といった記述がある。

しかし、このような記述は、ヘブライ民族が旧約聖書に示されているから肉食することに抵抗がなかったということの意味するものではなく、逆に、牧畜民族としての生活から形成された思想であると考えなくてはならない。それゆえ、ここを出発点とするキリスト教は、当然その動物観の起源を牧畜生活に負っているのであろう。

これに対して、仏教では「不殺生戒」を説いてあらゆる生き物の生命を尊重しようという目標を掲げている。このことに関して、筑波常治は「仏教の影響と肉食禁止」として次のように述べている。

動物タンパクの補給は、魚介類でまかない得たから、獣肉はそれほど必要でもなかったわけである。これによって、日本に仏教が普及しやすく、またそれにつれて肉食の禁止がかんたんにおこなわれた理由がよく説明できると思う。明治以前の日本人は、四つ足の動物の肉をほとんど食べなかった。そのため畜産が発達しなかった。この原因として、仏教の影響をあげるのが通説になっている。^(註5)

これまで、生命尊重に関する3つの視点を紹介してきた。こうした考えはきわめて一般的だが、

これはいずれも「消極的な観点」だと藤武（ふじ たけし）滋賀大学教授は言っている。^(註6)

藤が指摘したように、他者の生命や自己の生命を傷つけたり奪ったりしないことは重要なことではあるが、それだけでは本当に生命を尊重しているとは言い切れないと考えられる。それは、「消極的な生命尊重」の域を出ていないからである。

5 これからの保育者に必要な2つの視点

それでは、積極的な生命尊重とはどのようなものであろうか。それは、深い「縁」があってこの世に授かった〈いのち〉を最高に輝かせて生きようとする姿勢ではないだろうか。そこで、積極的な生命尊重の視点として次の2つをあげておきたい。

- (1) 自己の特性を最高に発揮しようという視点
- (2) 子どもの可能性を十分に伸ばそうという視点

(1) 自己の特性を発揮するという視点

人はいつか必ず死ぬ存在である。しかも、「その日」がいつ自分に訪れるかを知ることができないし、自分で決めることもできない。死ぬことを「お迎えが来る」と表現することがあるのは、そのためであろう。だからこそ、悔いのないように、1日1日を精一杯生きなくてはならないと考えるのであるが、学生を見ているとそうした意識はほとんど感じられず、毎日を「なんとなく」生活しているようにさえ見えるのである。

先に引用した中村は、小学生だけでなく「死んでも生きかえると思っている女子大生や歯学部の学生がいる」ことを取り上げて（同上書 25ページ）、「現代の子供たちのひき起こす多くの残忍な事件の背景には、子供たちのまわりから死が遠ざけられているということがひとつの要因になっているのではないかという仮説を持つにいたしました」と述べている（同上書10ページ）。

「毎日をなんとなく生活している学生」と「残忍な事件を引き起こす人」には共通点がある。それは、どちらも〈いのち〉の本当の姿が理解できていないことである。そして、その原因は当事者にあるというよりも「死が日常生活から遠ざけられてしまった現代社会」の構造に問題が潜んでいるのではないだろうか。

このような社会で、学校や家庭でいくら「生命を大切にしましょう」と言葉を尽くして「教えても、本当に〈いのち〉を大切にすることを子どもに根づかせることは難しいのではないだろうか。その理由は、「生命を尊重する心」は教室で知識として教えるだけでは不十分で、実際に〈いのち〉と関わるという日々の生活を通して「自分自身で気づく」ことでしか、本当にわかる（自分の生き方につなげる）ことにはならないからである。

もちろん、時間を後戻りさせることができるはずもないから、農村を中心に大家族で暮らしていた昔の日本に帰りましょうなどというつもりはないが、本気で生命を尊重する心を育もうとするならば、以前の日本ではあたりまえであったように、日常生活を通じて「生まれることや死ぬこと」が体験できる場を設定しなくてはならない。

このことは、幼稚園や保育園において野菜を栽培したりや草花を育てたりすることや動物飼育などを通じて実践できる。また、日常の保育活動や運動会・発表会等の行事に地域の高齢者や

園児の祖父母などを招待して一緒に活動することもできるであろう。こうした活動を通じて、子どもたちは「老いること」や「死ぬこと」といった現実の〈いのち〉と直接にふれあうことができ、そこから多くの「気づき」が得られるのである。

そのことについて、ある保育園における野菜栽培の事例を紹介しておこう。群馬県T市に隣接するA保育園では毎年、園庭の隣に設けられた畑で子どもたちといろいろな野菜を栽培している。あるクラスでミニトマトを栽培したときのことである。先生が用意したミニトマトの苗を植えてみんなでときどき水やりをしながら成長を観察していた。やがて、かわいらしい花が咲いて小さな実がたくさんついてきた。

子どもたちは毎日トマトのようすを観察して先生に知らせに来るが、その表情はいきいきと輝いている。トマトの実がだんだん大きくなって赤みを帯びてくると、子どもたちの声が一段と熱を帯びてきたそうである。「先生、赤くなってきたよ」「いつ採るの」「もっと赤くなってからね」(先生の言葉)「先生、〇〇個になっているよ」子どもたちの声も日に日に大きくなっていった。

先生が「それでは〇日に採りましょうね」と言うと、翌日からは「先生、あと〇日だね」とカウントダウンが始まったそうである。約束の前日は「先生、明日だよね」「天気になると良いね」と、お帰りのしたくをしている子どもたちは本当に楽しそうだったと担任の先生が話していた。いよいよミニトマトを採る日になると、登園した子どもたちは口々に「先生、今日だよね」「お天気で良かった」と本当に嬉しそうだった。

ところが、子どもたちと一緒に畑に行った先生が、「さあ、みんなで採りましょう」と声を掛けても、だれひとり採ろうとしなかったそうである。あれほど楽しみにしていたので、不思議に思った先生が「どうしたの」と声を掛けると、子どもの口から「だって、かわいそうだもん」という意外な言葉が返ってきたというのである。

この出来事を伝える先生の顔は、本当に嬉しそうだった。「私はトマトを採るのがかわいそうだななどと、ひとことも言ったことがなかったのです」「でも、心をこめて育てていると、大切にしなければいけないという気持ちになるのですね」という言葉から、私は保育や教育の要点を教えられたと思った。すでに述べたように、都市化や核家族化が進んだ現代社会では〈いのち〉とふれあう機会が少なくなってしまった。野菜の栽培や動物飼育は、子どもが〈いのち〉の姿に気づくことができる貴重な場でないだろうか。

こうした体験だけでなく、筆者は数年前から学生の学習意欲を高めることを目的に、前後期の最初の授業で、学習に取り組むためのガイダンスとして、中学校の理科(生物)や家庭科で取り上げられている内容を参考にして〈いのち〉の話を行っている。その内容は、人間として生まれることがいかに大変なことであるのか・そうして生まれた〈いのち〉にもいつか必ず死がおとずれること・その日がいつなのかはわからないから今日をしっかりと生きようとする気持ちが大切なこと等である。その反応は筆者の予想を遙かに超えるものであったため、その結果についても紹介しておこう。

まず、授業で取り上げた〈いのち〉の話の内容を要約すると次のようになる。

①この世に生を受けるための受精の確率が限りなくゼロに近いこと。

(女性の体内にある卵子の数はおよそ700万個で、そのうちの1つが受精して自分の〈いのち〉になるから700万分の1で、精子は一度に放出される約1億のなかのたった1つが受精するか

ら1億分の1で、受精の確率は700兆分の1という小さなものであることを説明する)

- ②受精卵の細胞数はたった1個だが、母親の子宮にいる10か月ほどの間に60兆個という数の細胞に分裂して、手足や内臓といったさまざまな身体が形作られることの不思議さ。
- ③世界中で自分の〈いのち〉はたったひとつしかない、かけがえのない存在であること。
- ④だれの〈いのち〉もオンリーワンであり、他人と比べて序列がつけられないこと（自分に自信を持って生きることの大切さに気づくこと）。
- ⑤それほど尊い〈いのち〉でも、必ず終わりが来ること。しかも、その終わりは突然にやってくる。来てほしくないと思っても拒めないこと。
(それゆえ、いつ終わりが来ても後悔することがないように、1日1日を大切に生きなければもったいないということ)
- ⑥自分の〈いのち〉は自分以外の人や動植物の〈いのち〉とつながっているから生きていられること。(人はひとりではいきられない生き物であるということ)
- ⑦人間にとって大切なことは、終わりが来るまでの時間をどのように使うかをしっかり考えることである。

このような内容の話を授業への取り組み方のガイダンスとして話したところ、期待した以上の反応が返ってきたので、そのいくつかを紹介する。

[学生A] 私は今まで生まれてきて当たり前だと思っていましたが、その考えが間違っていたことに気づきました。

[学生B] 保育者を目指す私は、もっと真剣に勉強しなくてはいけないと思いました。

[学生C] どのような〈いのち〉もかけがえのない、たったひとつの〈いのち〉であり、自分の代わりなどいないことを忘れてはいけないと思いました。

多くの学生から伝わってきた感想をまとめると、

- ①これまで〈いのち〉について本気で考える機会がほとんどなかった。
- ②これまでは生きていることをあたりまえだと思っていた。
- ③この世に生まれることがどんなに大変なことであるかを考えた。
- ④〈いのち〉は本当に大切なものだと身にしみて感じた。
- ⑤自分の〈いのち〉はひとつしかないことに気がついた。
- ⑥〈いのち〉はいつ終わりが来るかわからないから、1日1日を大切にしなければいけないと思った。
- ⑦自分を産んでくれた両親に感謝しなければいけないと思った
- ⑧保育者になったら子どもの〈いのち〉をしっかりと守ろうという気持ちになった。
- ⑨子どもにも〈いのち〉の大切さを伝えようと思った。

ほとんどの学生がこのような感想を書いていた。このことから、〈いのち〉について考える機会が少ないことが改めて確認できたので、こうした話をこれからも続ける必要があること、ここに紹介したような学生の気持ちをどのようにして持続させるかを工夫することが重要であると考えている。その一方で、保育園児だけでなく学生にとっても栽培や飼育の体験が〈いのち〉についての「気づき」に大きな影響を与えると考えられるので、そうした機会も設ける必要がある。

(2) 子どもの可能性を伸ばすという視点（まとめに代えて）

スイスの動物学者であるポルトマンが「人間は生理的な早産である」と仮定したように、牛や馬といった人間以外のほ乳類に比べると、ヒトの赤ちゃんは非常に未熟な状態で生まれてくる。新生児は自分の頭を支えることすらできないし、寝返りやハイハイをすることもできない。やっとつかまり立ちができるようになるまでには、1年近くの時間が必要になる。

このように未熟な状態で誕生するのは、人間が他のほ乳類よりも「進化」したからであると言われる。そのことをランゲフェルドが「人間は教育され得る生き物」と言ったのであるが、ヒトが教育されてどのように成長するかは、乳幼児期の環境に左右されるところが少なくない。未熟であるからこそ、誕生してから受ける環境の影響が大きいのである。このように考えると、乳幼児に「生命を尊重する心」を育むためには、人的な環境としての保護者や保育者のあり方が大きく影響することがわかるのではないだろうか。

子どもは無限の可能性を秘めて生まれてくるといわれる。その可能性の芽がどのように伸びていくのかは、子どもが生活する環境によって大きく異なる。環境というのは物的な環境や自然環境もあるが、特に重要なものは人的な環境としての保護者や保育者の存在である。

〈いのち〉の誕生については既に触れたのでここではくり返さないが、保育に携わる保育者や保護者を目指す学生はそのことをしっかりと認識し、子どもの成長のモデルとして日々の生活を営まなくてはならない。その理由は、乳幼児期の発達の特徴に目を向ければすぐに気づくところである。それは、食欲に周囲の人を観察して価値判断をすることなくその行動をまねたり周囲の人の影響を強く受けたりしながら成長するからである。

つまり、保育者が子どもの〈いのち〉を尊重するということは、子どもの中に秘められている可能性の芽が十分に伸びるように働きかけることである。しかも、それは言葉で行えることではなく、子どもと保育者がふれあう中で、保育者自身の生き方を通じて行われるのである。

幼児期の心に「生命を大切に作る心」をいかにして育てるかということは、大きな課題の一つである。しかし、その目標は「いのちを大切にしましょうね」と言葉で教えることで達成できるわけではない。そうではなく、日々の生活における保護者や保育者やお友だちとの関わりや、生活環境の中で体験する動物・植物とのふれあい等を通じて子ども自身の心に芽生えてくるものではないだろうか。その意味で、幼稚園や保育園で日々乳幼児と接する保育者の姿は、乳幼児がどのように成長していくかを方向づける重要な力を持っている。それゆえ、子どもに「生命を尊重する心」を育むためには、まず保育者自身の心に生命を尊重する心を育て、その心で日々の生活を営むように指導することが重要であろう。

保育という営みには、ポルトマンが指摘したような「未熟な」乳幼児の〈いのち〉を保護すること、自立に向けて望ましい発達の援助をすることという二つの要素が含まれている。それゆえ、保育に携わる者には〈いのち〉に対する深い洞察が求められることは間違いない。その意味で、保育者自身が「自己の〈いのち〉をどう生きようとしているのか」が問われなければならないはずである。

ところが、核家族化や都市化が進んだ現代社会では、保育や幼児教育も理論や言葉による活動に重きがおかれるようになってしまった。そのために、〈いのち〉の本当に姿がわからなくなり、そのことが冒頭に触れたようなさまざまな「事件」が引き起こされることにつながっているの

はないだろうか。

本稿では、保育現場における一つのできごとと筆者が授業で試みた一つの事例を取り上げながら、今後の保育者養成教育における〈いのち〉教育の必要性について考察した。保育は「環境による教育」である。中でも人としての環境である保育者の存在は大きな意味を持っている。その視点から〈いのち〉に対する深い洞察をもった保育者が必要とされるのではないだろうか。

- (註1) 『死ぬことと生きること』76ページ 築地書館：1997年発行
- (註2) 中村博志『死を通して生を考える』14ページ リヨン社：2006年発行
- (註3) 中村 同上書 15ページ
- (註4) 竹山通夫『ヨーロッパの旅』229ページ 新潮文庫：1968年発行
- (註5) 筑波常治『米食・肉食の文明』103ページ NHKブックス：1970年発行
- (註6) 藤 武「仏教の精神と生命尊重の保育の実践」日本仏教保育協会編『生命尊重の保育とは』所収
22ページ 鈴木出版社：1986年発行

【参考文献】

- 日本仏教保育協会編『生命尊重の保育とは』日本仏教保育協会 1986年発行
- ローリー・クラスニー・ブラウン：マーク・ブラウン『死って、なに？』文溪堂 1998年発行
- 対談集 宮台真司・香山リカ『少年たちはなぜ人を殺すのか』創出版 2001年発行
- アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波書店 2001年発行
- 中村博志編著『死を通して生を考える教育』川島書店 2003年発行
- 鳩貝太朗・中側美穂子編『学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究所 2003年発行
- 日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社 2004年発行
- 『子どもに「いのち」をどう教えるか』児童心理臨時増刊 No.819 金子書房 2005年2月号
- 有村久春編『命を大切にす教育をどう進めるか』教育開発研究所2005年発行
- 中村博志『死を通して生を考える』リヨン社 2006年発行
- 得丸定子編『いのちの教育をひもとく』現代図書 2008年発行
- 山崎晃資編『少年事件 おとなは何ができるか』同人社 2008年発行
- 近藤卓編『いのちの教育の考え方と実際』現代のエスプリ499 至文堂 2009年発行
- 土門 拳『死ぬことと生きること』みすず書房 2012年発行
- 中村桂子『知の発見』朝日新聞社 2015年発行

(2016年2月15日受理)